

検討準備会の振り返りについて

平成29年3月14日開催の「自動運転の社会実装に向けた研究の検討準備会」等における主な意見は次のとおり

- 自動運転が普及すれば、社会的弱者、例えば視覚障害のある方が移動しやすくなると思う。
- 京都で自動運転技術を活用して解決したい課題は何か、明確にした方が議論を進めやすい。
- 自動運転が公共交通と私的交通の境界を和らげるという視点は重要。
- どういったエリアでどのように自動運転を導入すべきかを考えたい。
- 自動運転社会を受け入れる環境整備も必要。京都モデルを構築できればよい。
- 高齢の運転車による交通事故が増えつつあることへの対策として検討できると良いのではないか。
- 公共交通だけでなく、物流業界についても将来的なニーズをどのように捉えるのか注目している。高齢・障害者等移動制約者の問題の解決に繋がる可能性もある。
- 自動運転車両が公道を走行するには、道路管理者と交通管理者の連携を大幅に強化する必要があると思う。
- こうした新たな取組で後発になりがちな市内南部エリアも含めて自動運転活用の検討対象とした方がよい。
- 国の社会生活基本調査（生活行動）の結果では、若者が外出しなくなっている。移動を我慢しているケースもあり、自動運転はこうした顕在化していない移動需要を拾えるツールになるのでは。
- 自動運転車両にヒューマンエラーは存在せず、システムエラーでしか事故が起こらないので、事故件数は確実に今よりも減少する。ただし、自動運転車両の事故の被害者や遺族は、感情のやり場がないかもしれない。
- 交通量の多い都市部では、自動運転車両と手動の車両が混在した状況だと、性能を発揮できないのではないかと。自動運転車両には、鉄道や緊急車両のように、他の交通を遮断してでも走行できる特権的な地位を与える必要があるのでは。
- 京都市では、都市特性（平坦な市街地、学生が多いなど）から、自転車が他都市よりも重要な交通手段になっている。自動運転との関連で、自転車の問題を解決できるような仕組みづくりができればよい。
- 高速道路、幹線道路など基幹交通網における自動運転車両のサービスは、国の考え方を踏襲することにして、端末交通の部分を考えればよいのでは。